

氏名	近藤華子
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第167号
学位授与年月日	2013（平成25）年9月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	岡本かの子論 —— 描かれた女たちの実相 ——
論文審査委員	主査 倉田 宏子（日本文学専攻 教授） 副査 山口 俊雄（日本文学専攻 教授） 副査 高頭 麻子（史学専攻 教授） 副査 源 五郎（日本女子大学名誉教授） 副査 宮内 淳子（元 帝塚山学院大学 教授）

論文の内容の要旨

本論文は、岡本かの子文学で描かれた女たちの実相を明らかにしようとする試みである。

これまで研究の礎とされてきたのは、〈かの子神話〉と称される作家の像であった。夫・岡本一平や息子・岡本太郎、同時代の文学者などによって語られた波乱に満ちた劇的な人生及びその強烈な個性は伝説となり、夫はかの子のことを「エゲリア」（泉の女神）、「観世音菩薩」、「生命の娘」と呼び、神格化した。〈かの子神話〉に基づく読みを決定的にしたのは、亀井勝一郎である。亀井は、描かれた女たちを「若さを貪婪にむさぼる「川の妖精」とみなし、描かれた女たちは、「エゲリア」、「ウールムッター」（原母）、「化け物」といった幻想的で実体のない存在として読まれてきた。かの子文学最大の理解者とされる亀井の論は、大きな影響力をもち、その後の研究においても長きに亘り基盤とされてきたのである。

近年になり、フェミニズム・ジェンダー批評が、従来の読み方に付着しているバイアスを浮かび上がらせた。本論文もフェミニズム・ジェンダーの視点からテキストを分析するものである。この他にも新たな研究の兆しが見え始めたものの、俎上に載せられる作品は代表作に偏っている観がある。かつて指摘されてきた現実離れした側面が、女たちに全くないわけではないのだが、その特質はごく一部の代表作に描かれた主人公たちにあてはまるものであり、全ての女たちに見出せるものではない。かの子文学に描かれた女たちの全貌は未だ明らかにされていないと言えよう。その意味において、極力多くのテキストを取り上げ、描かれた女たちの総体を捉えることを目指した。さらに、代表作に描かれた女たちについても、神話的な表層に隠された実相があると思われる。本論

文では、これまで表層的な主人公像に阻まれ研究の筆が届いていなかった女の実相の抉剔に努めた。

結婚・家・職業・母・老いという五つの軸を立て、第一章「結婚の要請に苦しむ女たち」、第二章「家業を担う女たち」、第三章「職業に従事する女たち」、第四章「母の規範を超える女たち」、第五章「老いに抗う女たち」という構成で展開した。いずれの軸も女たちの生涯に大きな影響を及ぼす制度や文化規範と深い関わりをもち、同時代の女の現実をしばしば抑圧していたものである。本論文では、描かれた女たちが、自らの〈自我〉と、それを抑圧する制度や文化規範と〈葛藤〉しながら生きているとみて、時代のコンテクストを導入し、個々のテクストの分析を行った。

第一章「結婚の要請に苦しむ女たち」では、女学校を卒業してから数年を経た若い女の姿が描かれる『晩春』（『明日香』一九三六・六）、『肉体の神曲』（『三田文学』一九三七・一、三、五～八、一二）、『娘』（『婦人公論』一九三九・一）を取り上げた。

第一節『『晩春』一鈴子の〈苦しみ〉』では、嫁入り先が見付からない女の抱いた〈苦しみ〉について、女学校教育を手掛かりにして探った。鈴子が結婚できないことに焦る背景には、結婚適齢期を過ぎると「老嬢」と蔑まれる時代の言説や女学校で行われていた良妻賢母教育があった。鈴子は、同時代の言説や教育を内面化することで、自己を追い詰めているといえよう。しかし、女学校は、他方、新たな知識を与え、個性や能力を伸長するという側面をも併せもつ。鈴子の〈苦しみ〉の内実を、時代の要請によって生み出された結婚願望と、教育のもつ本来的な力によって培われた内発的な自己実現の欲求との〈葛藤〉であると位置付けた。

第二節『『肉体の神曲』一揺らぐ〈肥満〉の意味一』では、時代のジェンダー規範に基づく他者のまなざしによって揺らぐ女について検証した。時代の美の規範から逸脱する〈肥満〉によって他者のまなざしに晒され、自由や自信を失っていた茂子は、山村で他者のまなざしから解放されたことで「有りのまゝ」の自己を受容する。ところが、山村から戻ると〈肥満〉を理由に求婚される。〈肥満〉をめぐる価値の転倒の背後には、健康な母体が望まれた戦時下の母性讃美の風潮があったことを指摘した。一度は他者のまなざしや時代の規範に囚われない、自分自身の価値観を立てたにもかかわらず、皮肉にも、〈肥満〉が時代の要求に合致するようになったことで、再びジェンダー規範に回収されていく茂子に、戦時体制に飲み込まれていく女の姿が浮き彫りにされていることを明らかにした。

第三節『『娘』一室子の〈空腹感〉一』では、スポーツ選手として活躍する女の〈空腹感〉を考察した。室子の〈空腹感〉とは、技術を上達させたい、勝利を得たいというスカルの選手としての野心である。スポーツ選手は女らしさに欠けているという同時代の偏見により見合いは上手くいかないが、スカルに没頭し、独身であることを気にしない室子は、母性を讃美し結婚を奨励する時代の要請から自由な存在として捉えられる。

しかし、末尾のスカルの競争で男に敗れる場面において、室子が「食はれ」てしまうと感じていることを、戦局が一層厳しくなる中、女子スポーツが本格的に体制に取り込まれていく時代状況と重ね合わせ、スカルの選手としての室子の〈自我〉が、時代の文脈に回収されていくと読み解いた。

第一章における分析により、年若い女たちが共通して、生きていく上で自己実現を果たしたいという希望や、生をより充足させたいとする渴望を抱いていることを明らかにした。しかし、それと衝突する時代の制度や文化規範との間で、女たちは〈葛藤〉し、〈苦しみ〉を抱いていることもあらわになる。女たちが、ジェンダー規範を内面化して自らを抑圧し、〈葛藤〉の末、最終的に時代のジェンダー規範に飲み込まれていくという姿も浮き彫りにされている。生への希望や渴望を内在させながら、現実と〈葛藤〉して生きる女たちは、現実と根差した存在として位置付けられるだろう。

第二章「家業を担う女たち」でも、第一章「結婚に苦しむ女たち」と同様、年若い女たちの姿が描かれる『渾沌未分』（『文芸』一九三六・九）、『鮪』（『文芸』一九三九・一）、『家霊』（『新潮』一九三九・一）を取り上げた。前章と異なっているのは、女たちの進む道が家業によって定められている点である。

第一節「『渾沌未分』—小初の希求したもの—」では、テキスト末尾における小初の姿が象徴するものを読み解いた。衰退の一途を辿る古式泳法「青海流」の家を再興するという目的のために、自らを「犠牲」にして妾になろうとする小初は、家意識を強く内面化する存在である。末尾の「遠泳会」の場面を、秩序によって殺された「渾沌」の寓話を援用することで、小初が家制度という秩序に本来の自己が抹殺されるという危機意識に襲われていると解釈し、「生まれたてほやぐの人間」になることを希求して大海原へと泳いでいくことを、本来の自己再生の道へと踏み出す行為として意味付けた。末尾で、家から解放されて本来の自己がもつ可能性を希求する小初の姿には、家と〈自我〉の〈葛藤〉及びその止揚を見ることができよう。

第二節「『鮪』—ともよの〈孤独感〉—」では、鮪屋の後継ぎであるともよの〈孤独感〉の内実について検討した。両親の期待とは裏腹に、鮪屋にも鮪にも情熱を注げないともよの〈孤独感〉の内実とは、鮪屋の後継ぎという逃れられない現実と、自己の想いと隔たりにあった。また、「女の子らしひ恥らひ」のないともよは、「婦徳」の観念が重要視されていた時代のジェンダー規範から逸脱しているために女学校で非難され、〈孤独感〉を抱かざるを得なかった。ともよの内に潜めた「自分を支へてゐる力」とは、『晩春』の鈴子同様に、知識を与え個性を育成するという女学校教育のもつ積極的側面によって育まれた主体的に生きようとする力であると意味付け、ともよを時代のジェンダー規範にも家にも抗い、主体的な生を希求する存在として前景化した。

第三節「『家霊』—くめ子と〈仕事〉—」では、どじょう屋の後継ぎであるくめ子と〈仕事〉との関係を考察した。『鮪』のともよと同じく家業に対する強い嫌悪感を抱く

くめ子は、一度は家を出て職業婦人として働く。しかし、それはくめ子が求めていたやりのある〈仕事〉とはかけ離れており、くめ子が家業を継いだのは、どんな〈仕事〉であっても結局は同じであるという挫折感によるものだと言えよう。くめ子の〈仕事〉への想いに変化をもたらしたのは、生涯を〈仕事〉にかけた彫金師・徳永老人の生き様とそれを支えてきた母の存在である。自己の〈仕事〉が「職業婦人」とは異なる意義をもつことを実感したくめ子に自覚と希望が芽生えたことを指摘した。テキストは、「諦め」によって継いだ〈仕事〉と主体的に向き合い、そこに生き甲斐を見出そうとするまでの女の〈葛藤〉を浮かび上がらせている。

第二章における分析により、女たちの〈自我〉と家との〈葛藤〉が明らかになった。人生の岐路に立っている女に、最終的にいかにか生きるかという選択を促したのは、自らに内在していた生への渴望や体験によって得た気付きであった。女たちは、従来読まれてきたように、旧家のもつ「霊」や「魂」といった人智の及ばない力によって押し潰される存在ではなく、満たされない思いを抱えて家の規範と〈葛藤〉しながらも、自らの生を希求していく生身の女としての存在感を放っている。

第三章「職業に従事する女たち」では、一、二章で検証した女たちよりも上の年代で、既に社会に出て働いている女たちが描かれた『越年』（初出誌未詳）、『花は勁し』（『文藝春秋』一九三七・六）を取り上げた。『夫人と画家』（『新思潮』一九二三・七）の夫人は、職業に従事しているわけではないが、『花は勁し』の桂子のプロトタイプであると位置付け、第三章に組み込んだ。

第一節「『越年』一加奈江と〈暴力〉一」では、丸の内の女性事務員である加奈江の男の〈暴力〉をめぐる心の移り変わりを追った。同僚の堂島に突然平手打ちされ、〈暴力〉を許さないという正義感に基づき男を殴り返すことで復讐を果たしたにも拘わらず、加奈江の心には揺らぎが生じる。加奈江が、職業夫人は女らしさが欠如しているという同時代の価値観に囚われていることを指摘した。揺らぎの内実とは、正義を貫くという〈自我〉と時代のジェンダー規範との〈葛藤〉である。さらに、堂島から愛を打ち明けられると、〈暴力〉を男らしい愛の表現として受け止め、彼に傾斜していく。男らしさは戦時下に求められた男性の魅力であった。第一章で取り上げた女たちと同じく、加奈江もジェンダー規範を内面化し、それに飲み込まれていく存在であると捉えられる。

第二節「『花は勁し』一桂子の光と影一」では、桂子のもつ光と影の両側面に焦点を当て分析した。桂子は、新興活花の師匠として革新的な自己表現を試み経済的自立を果たしている点において、自立した新しい女と言えるが、その一方で、子供を産んでいないことに苦しむ点に、母性礼讃の風潮が高まってきた時代のジェンダー規範を内面化することで自らを抑圧していることが指摘できる。愛する小布施は、ジェンダー規範を内面化する男として、桂子を妻・主婦という性別役割に押し込めようとする存在である。桂子の苦しみの要因は、〈自我〉と小布施への愛との〈葛藤〉にある。「丹花」のモチー

フを軸に読み解くことで、活花の展覧会において桂子が自己実現を果たしたことを明らかにし、小布施を失った桂子の苦しみや女としての幸福を求めながらも満たされぬ想いが、逆に桂子の芸術を支え、その生を輝かせていることにも着目した。

第三節『夫人と画家』―青い画の相克―では、女の芸術家の自己実現への希求と、それが男の芸術家によって阻まれる構造について検証した。同時代の画壇や文壇の思潮を導入し分析することで、自己の芸術を追い求めようとする夫人の描いた「青い画」が、時代の空気を的確に捉えた清新な画であることを明らかにした。画家が夫人を傷付け、夫人の「青い画」を破壊する行動の背後には、夫人の情熱と才能への嫉妬と、自己の存在意義を失うことへの危機感がある。画家は夫人の画の師匠でもあったので、師匠／弟子、男／女というジェンダー秩序が転倒し、女が自我をもった存在として立ち現れてきたことにより、夫人が排除されたことを指摘した。『夫人と画家』で男によって葬り去られた女の自我が、『花は勁し』に至り、女の芸術家の復権と自己実現の達成という形で結実したものとして位置付けられよう。

第三章における分析によって、職業によって経済的自立を果たしながらも、〈自我〉を貫き通すことが困難な現実と直面し、〈葛藤〉する女の姿があらわになった。女たちの〈自我〉を阻む現実とは、戦時下のジェンダー規範である。また第三章の際立った特徴として、男女の相克が挙げられる。ジェンダー規範を内面化する男の手によって、女の〈自我〉が抑圧され、破壊されようとする。女たちは男との関係において〈葛藤〉に追い込まれるが、男に対して愛情を抱いている場合、その〈葛藤〉はより一層深刻なものとなっていることを明らかにした。

第四章「母の規範を超える女たち」では、母である女たちが描かれた『母と娘』（『女性文化』一九三四・五）と『母子叙情』（『文学界』一九三七・三）を取り上げた。

第一節『母と娘』―密着から自立へ／戦争協力から反戦へ―では、第一次世界大戦後のイギリスを舞台にして描き出される母と娘の関係性の変化を追った。娘のアイデンティティを自己のそれと同一化している母が、陸軍士官になるという娘の希望を拒絶する背景には、反戦を提唱する自己の思想と対立する道を歩まないでほしいという想いがある。従わないならば親子の縁を断つということを意味する母の発言からは娘の子離れを受け入れることのできない母の様相が読み取れる。母娘の対立関係を和解に導いたのは、敗戦国ドイツの母の語りであった。戦争の悲惨さを認識した娘は、母が悲しみや弱さをも内包した一人の人間であることを理解し、母からの自立を果たす。娘と語り合おうと決心する母の姿にも、娘を対等な一人の人間と認めたことが表されている。戦争の悲しい記憶を共有した母と娘の関係が、共に依存する密着関係から、互いを個人として尊重し合う自立した関係へと変化したことを明らかにした。

第二節『母子叙情』―母子解放の〈通過儀礼〉―では、テキストの後半部で変化する母の心情及び母子の関係性を検証した。テキスト前半部において、当時の成人への

〈通過儀礼〉とみなされていた徴兵検査を忌避し、その代替となり得たはずの謝肉祭をも無効にすることで、息子を子供に留ませようとする「かの女」に、子離れできずに息子の成長を阻む母の姿を読み解いた。「かの女」は、母性礼讃という時代の規範に絡め取られ、母であることだけを自らのアイデンティティとし、母子密着に陥っていた。従来、母性愛と異性愛の融合とされてきた息子の形代である規矩男との関係性の変化については、「かの女」と息子の母子密着関係解体への〈通過儀礼〉と意味付けた。芸術家としての自己のアイデンティティを取り戻した「かの女」は、息子のことも一人の芸術家としてみるようになり、一対一の間人同士として対峙するようになるのである。

第四章の分析では、女たちが、母であるがゆえのアイデンティティの〈葛藤〉を内包していることを明らかにした。自己本来のアイデンティティを取り戻し、一人の間人として子供と対峙する女たちには、これまで指摘されてきた神話的な理想の母ではなく、母の規範と〈葛藤〉しながらも、自らのアイデンティティを希求する女の生の姿が浮き彫りにされていると評価できよう。

最終章である第五章「老いに抗う女たち」では、老年に至った女たちの生き様が描かれる『かやの生立』（『解放』一九一九・一二）、『老妓抄』（『中央公論』一九三八・一一）を取り上げた。

第一節『『かやの生立』—越境する〈乳母〉お常の両義性—』では、乳母であるお常の多面性を検証した。お常は、かやを母親のごとくに慈しみ、養育するという乳母に課せられた役割を十分に果たしており、その背後には、生涯働き続けてきたという自尊心がある。しかし、お常の乳母の規範から逸脱する面にも注目した。年齢に不釣り合いな、若い女のようななまめかしい姿態で恋愛をするお常は、乳母という役割には収まり切らない生身の女としての側面と浮かび上がらせている。乳母の役割だけでは満たされない一人の女としての渴望を内在させているお常には、自らの生を果てしなく追い求める女の生き様をみることができよう。

第二節『『老妓抄』—芸者が舞台を降りるとき—』では、老妓の芸者として歩んできた生涯に着目し、老境に至った後の心情や行動の意味を考察した。幼少の頃から老年に至るまでの芸者としての老妓の生涯を同時代資料を援用して跡付けることで、老妓が物心ついた時から苦界に身を置き、金銭に呪縛され、自由を奪われた籠の鳥として生きてきたことを明らかにした。ようやく自由を得た老妓が欲したのは、芸者でも堅気でもない新しい生き方であった。

第五章での分析により、女たちが老年にいたってもなお、現在の生では決して満たされずに新たな生を希求し続けていることを明らかにした。女たちの生き様は、肉体が衰え始めると同時に精神的にも世俗を離れた境地で人生の終わりを静かに待つ、という老いの規範に抗うものとして指摘できる。老妓は「化物」、「グレートマザーの化身」、「エゲリア」、「他者の生気を奪う、〈水の精〉」などと読まれてきたが、老妓の果てしない生

への渴望は、異形の者の妄執ではない。「年々にわが悲しみは深くして／いよよ華やぐいのちなりけり」という短歌に表されているように、老妓には決して満たされることのない「悲しみ」がある。しかし、その生への渴望こそが老妓の命を輝かせているのである。芸者としてしか生きられなかった不如意な女の生は、「悲しみ」であると同時に、「華やぐいのち」の源でもあると読み解いた。

岡本かの子文学に描かれた女たちの実相を、一三のテキスト分析によって跡付けた。全体を総括して指摘すべきこととして、女たちは年代や置かれた立場や状況に関係なく、現状の生では満たされずに自己の生をより充足させたいという渴望を一貫して抱いている点を挙げることができる。さらに、生の悲哀や苦しみを内包している点においても共通している。本論文では、自足することなく自己を追求する女たちの生を押し進めているのは、自らの不如意な生に対する悲哀や苦しみであることを示した。

「豊かな生命力」、「高いいのちへの憧れ」とは、従来からかの子文学の重要なテーマとされてきたが、女たちの「生命力」の根源については見過ごされてきたと言えよう。さらに、女たちが神話的な存在と看做されてきたことの主な要因は、女たちが抱える苦しみの内実について理解されてこなかったことにあるのではないか。時代のコンテキストを導入して女たちの苦しみを読み解いていくと、様々な年代、境遇、立場にあるそれぞれの女たちが、現実には直面している困難が浮き彫りなる。本論文では、女たちの〈自我〉を抑圧し、自由を阻害するのは、家制度及び時代のジェンダー規範であることを明らかにした。それらとの間で〈葛藤〉し、苦しまざるを得ない女たちは、現実に根差した生身の女であり、同時代の女の実相を浮かび上がらせている。

以上のように、普遍的な人間としての生への欲求を描くと同時に、同時代の女が直面している問題にも目を向け、現実に生きる女の実相を抉り出している点は、かの子文学の従来指摘されてこなかった優れた側面であり、その深遠さを示すものとして高く評価されるべきであろう。

論文審査結果の要旨

論文の概要

日本近代女性文学を代表する一人である岡本かの子の文学研究は、従来、夫岡本一平や息子岡本太郎らによる人間かの子をめぐるいわゆる〈かの子神話〉を基盤とされてきたといっても過言ではない。亀井勝一郎らによる〈かの子神話〉に基づく作品の読みが長きにわたり強い影響力を持ち、かの子作品には、母性や神秘性が強調された幻想的で実体のない女性像が描かれているかのように解されてきたのである。近年は、フェミニズム批評やジェンダー批評などの新たな研究方法により、さまざまな角度からの読み直しが始まり、従来の読みの偏りを浮かび上がらせる面もみられるようになったが、研究対象は代表作の

一部に留まっており、かの子文学の全容を解明する拡がりには至っていない。

そうした研究史に対し、本博士請求論文は、かの子の実人生と文学を峻別し、作品に描かれた女たちの実相を闡明することをめざしている。研究対象を、結婚・家・職業・母・老いという女性をめぐる切実な問題軸を立てて選び出し、フェミニズム批評やジェンダー批評、カルチュラル・スタディーズ等の研究方法により解説し、かの子文学の従来不十分にしか知られていない側面、あるいは知られざる側面を浮き彫りにすることで、従来の研究の枠組みの刷新をも企図したものである。代表作だけでなく、従来等閑に付されてきた作品にも着目し、小説十二篇・戯曲一篇の計十三篇を取り上げて、再評価や掘り起こしをめざした。

論文の構成は、以下の通りである。

序章

第一章 結婚の要請に苦しむ女たち

第一節 『晩春』——鈴子の〈苦しみ〉——

第二節 『肉体の神曲』——揺らぐ〈肥満〉の意味——

第三節 『娘』——室子の〈空腹感〉——

第二章 家業を担う女たち

第一節 『混沌未分』——小初の希求したもの——

第二節 『鮫』——ともよの〈孤独感〉——

第三節 『家霊』——くめ子と〈仕事〉——

第三章 職業に従事する女たち

第一節 『越年』——加奈江と〈暴力〉——

第二節 『花は勁し』——桂子の光と影——

第三節 『夫人と画家』——青い画の相克——

第四章 母の規範を超える女たち

第一節 『母と娘』——密着から自立へ／戦争協力から反戦へ——

第二節 『母子叙情』——母子解放の〈通過儀礼〉——

第五章 老いに抗う女たち

第一節 『かやの生立』——越境する〈乳母〉お常の両義性——

第二節 『老妓抄』——芸者が舞台を降りるとき——

終章

続いて、各章各節の概要を述べたい。

第一章「結婚の要請に苦しむ女たち」では、女学校を卒業して数年を経た年若い女たちを描いた『晩春』（『明日香』1936・6）、『肉体の神曲』（『三田文学』1937・1・3・5～1938・12）、『娘』（『婦人公論』1939・1）を取り上げている。主人公たちは共通して、自己実現を

果たしたいという願望や、生をより充実させたいという渴望を抱きながら、同時代の家制度や文化規範との間で葛藤する苦しみを抱いており、最終的には時代の規範に飲み込まれざるを得ない姿を浮き彫りにしていることを指摘している。

第一節『『晩春』——鈴子の〈苦しみ〉——』では、結婚をめぐる、ジェンダー規範と女学校教育の進歩的側面による自己実現への欲求との間で葛藤する鈴子像を指摘し、満たされない思いを逆に生への活力に転化させてゆくかの子文学の特色の出発点を示す作と位置づけている。なお、本テキストは、文壇デビュー作『鶴は病みき』と同時期に発表されながら、かの子全集において「随筆項目」に入れられ埋もれていたのを、本論が初めて小説として発掘した。

第二節『『肉体の神曲』——揺らぐ〈肥満〉の意味——』では、〈肥満〉という問題を通して、戦争を媒介した女をめぐる規範の変容を炙りだした小説であることを検証している。また、侮蔑であれ礼賛であれ、いずれも他者の一方的な〈眼差し〉に揺らぐヒロインの内面を抉剔し、最終的には戦時下という時代に回収されざるをえない女性像の形象化であることを明らかにした。

第三節『『娘』——室子の〈空腹感〉——』は、川端康成によって「美の一つの極限」「霊界へ射し通る稲妻」などと評されてきた本テキストの読みのコードを刷新した論である。スカル選手である室子の抱える〈空腹感〉とは、スカル選手としての自我や野心であることを指摘し、戦時下の女性とスポーツの問題、家をめぐる庶子の問題などを通して、自己の欲求と戦時下の規範との間で葛藤しながら時代に飲み込まれてゆく姿を描いていると読み解いた。

第二章「家業を担う女たち」では、家業によって進む道が定められている年若い女たちを描いた『混沌未分』（『文芸』1936・9）、『鮎』（『文芸』1939・1）、『家霊』（『新潮』1939・1）という代表作を論じている。これらのテキストの主人公は、従来、旧家のもつ「家霊」や「魂」といった人智の及ばない力にとらわれている存在と解されてきたが、主人公たちは、人生の岐路に立ち、家をめぐる規範と自己の欲求との狭間で葛藤しながら、自己に内在していた生への渴望や希求に促されて、自ら生き方を選択していくと読み解いている。

第一節『『混沌未分』——小初の希求したもの——』では、従来、主人公小初は「亡霊の代弁者」などという幻想的な存在として捉えられてきたのに対し、「青海流」の次期家長としての意識にとらわれて、そのために妾になる決意をしていた現実的存在と捉え直した。最終場面の遠泳会において、本来の自己の可能性を探求しようとする姿勢に転じたことを、中国の荘子の「混沌」の寓話を援用して読み取っている。

第二節『『鮎』——ともよの〈孤独感〉——』では、従来、湊中心に読まれてきたテキストを、鮎屋の跡取りであるともよを中心に読み解いた。湊とともよの〈孤独感〉の内実の差異を明らかにし、湊の語りを、ともよが戦時下における鮎屋という家業への嫌悪感から脱するためと、未来に向かって主体的に生きる姿勢を見出すために不可欠であったと意味

づけている。

第三節『家霊』——くめ子と〈仕事〉——」では、従来、くめ子が家業であるどじょう屋を継いだのは、神秘的な〈家霊〉の促しによると読まれてきたテキストを、自らの職業婦人としての挫折と、自己の経験とは対照的な母と徳永老人の〈仕事人〉としての仕事への情熱に感応したためと読み解いている。

第三章「職業に従事する女たち」では、第一・二章で検証した女たちよりも上の世代で、既に社会に出て働いている女たちを描いた『越年』（初出誌未詳）、『花は勁し』（『文藝春秋』1937・6）、戯曲『夫人と画家』（『新思潮』1923・7）を取り上げている。職業によって経済的自立を果たしながらも、ジェンダー規範によって自身を貫くことが困難な現実直面し葛藤する女の姿を指摘している。この章では、とりわけ男女の相剋に光をあて、男に愛情を抱いている場合、葛藤は一層深刻なものとなることを明らかにした。

第一節『越年』——加奈江と〈暴力〉——」では、従来、等閑に付されてきた小説『越年』を取り上げている。丸の内の女性事務員加奈江は、日中戦争下で、同僚の堂島に〈暴力〉をふるわれる。冷やかな男の同僚たちに対し、女の同僚たちは、〈暴力〉を許さず闘おうとする加奈江と共に闘うという連帯を示す。しかし、この〈暴力〉が愛情に起因していたことを知った加奈江は、〈暴力〉を男らしい愛の表現とみなし、堂島に傾斜してゆくところに、戦時体制下の男らしさの規範の内面化を指摘している。

第二節『花は勁し』——桂子の光と影——」では、「新興活花の師」で革新的な芸術家である桂子は、同業者の迫害にも屈せず経済的自立を果たすが、戦時下母性政策を内面化しているために、小布施を愛しながら結婚せず子供を産んでいないことへの罪悪感に引き裂かれていることを指摘。そうした桂子の光と影を、「丹花の呪禁」、ジョルジュ・サンドやジャンヌ・ダルクのもつ意味を読み解くことにより浮き彫りにし、女としての満たされぬ思いが、逆に桂子の芸術を支えている構造を解み解いた。

第三節『夫人と画家』——青い画の相克——」は、1923（大正 12）年に書かれた戯曲『夫人と画家』の「夫人」は職業に従事しているわけではないが、『花は勁し』のプロトタイプであると位置づけ、取り上げている。自己の芸術を追い求めようとする夫人の描いた「青い画」は、時代の空気を的確に捉えた清新な画であるが、ゴッホに憧れる画家は夫人の才能に嫉妬し、「青い画」を破壊する。この女性芸術家の自己実現の問題は、後の『花は勁し』に引き継がれると指摘している。

第四章「母の規範を超える女たち」では、母である女たちが描かれた『母と娘』（『女性文化』1934・5）、

『母子叙情』（『文学界』1937・3）を取り上げている。一人の人間として子供と対峙する女たちは、従来指摘されてきた神話的な理想の母ではなく、母性をめぐる規範と葛藤しながら自らのアイデンティティを希求する現実的な生身の女の姿であると捉え直した。

第一節『母と娘』——密着から自立へ／戦争協力から反戦へ——では、1934（昭和9）年に書かれた外遊土産の習作で、先行研究のない『母と娘』を取り上げている。母と娘が、密着関係から互いに自立した人間同士として共生するまでの過程が、第一次世界大戦後を背景に、娘の戦争協力から反戦へと転換する過程と重ね合わせて描かれていると読み解いた。戦争協力的側面を指摘されるかの子の平和への願いが込められた注目すべき作品の掘り起こしであり、『母子叙情』の先駆作とも位置づけている。

第二節『母子叙情』——母子解放の〈^{イニシエーション}通過儀礼〉——では、従来、生身を伴わない理想の母親像と指摘されてきたテキストを、母性礼賛の時代を背景に、母子密着関係に陥っていた母が、擬似母子関係の解体を契機に、自己のアイデンティティを取り戻し、息子と一対一の人間同士として対峙できるようになるまでが描かれていると読み解いた。時代の規範と葛藤しながら、自己のアイデンティティを希求する母親の姿と、〈通過儀礼〉を経ずに苦悶しながら成長を遂げる青年たちの形象化を高く評価している。

第五章「老いに抗う女たち」では、老年に至った女たちの生きざまが描かれている『かやの生立』（『解放』1919・12）、『老妓抄』（『中央公論』1938・11）を取り上げ、女たちが老年に至ってもなお、現在の生では満たされず、新たな生を希求していることを明らかにしている。

第一節『かやの生立』——越境する〈乳母〉お常の両義性——では、かの子の初の小説を取り上げ、乳母お常の〈乳母〉という役割だけには納まりきれない生身の女の両義性の形象化を検証した。

第二節『老妓抄』——芸者が舞台を降りるとき——では、芸者の理想とした将来には二つの道があり、一つは旦那に落籍されること、いま一つは「看板ぬし」になり芸者屋を経営することであるが、老妓は理想的な出世を遂げたと捉え、それは自由を求めたからであると指摘。しかし、新たな生を求める方法が「たった一人の男」を見つけることであったのは、芸妓が身に付けた悲しい価値観によるとし、柚木への金銭的援助の意味を読み解く。この方法は、相手を金銭で縛ることになり、結果、老妓は柚木によって新たな生きる道を見出すことはできないと結論づけている。にも拘わらず、満たされない思いが、逆に老妓の命を輝かせていると指摘している。

審査結果

岡本かの子文学を、作品の読みに影響を与えてきた〈かの子神話〉から解放するために、かの子の十三篇の作品を、主として女性登場人物の内面と文化規範との葛藤という観点から精読することで、主として一九三〇年代を生きた女性の実相を明らかにするという本論文の目標は、基本的に達成されていると評価された。以下、本論文の特色と意義をまとめた。

第一に、『混沌未分』『母子叙情』『花は勁し』『老妓抄』『鮎』『家霊』などの代表作だけでなく、これまで随筆や小品として顧みられることのなかった『夫人と画家』『晩春』『か

やの生立』『母と娘』『越年』などの価値を発見して、論を展開したこと。

第二に、フェミニズム批評やジェンダー批評による作品分析が概ね妥当で、これまでの読みを大きく刷新し得たこと。

第三に、描かれた女たちが家制度や時代のジェンダー規範にどう抑圧されたか、その中でどのような葛藤があったかに一貫して注目し、葛藤を経て自己の欲求や願望に従おうとする主人公が多いものの、時代のジェンダー規範を内面化してしまい、動きの取れない女たちのいることも指摘されている。非現実的な女神のように言われてきた女性たちについて、むしろ時代のジェンダー規範と闘っている姿を詳細に分析しえている。例えば、従来は好対照といわれてきた『母子叙情』の二人の母親が、時代の求める母性神話を内面化している点で本質的には同じであること、『かやの生立』の乳母お常が、乳母の規範からも老女の規範からも逸脱しているなどの指摘は鋭い。

第四に、時代のコンテクストを導入して、同時代の女学校教育のあり方や、戦時下の世相の描写についても、作品にどのように反映されているかが分析されている。これは、従来、かの子文学には社会性がないと指摘されてきたことへの反論となる。例えば、女学校教育は、知識を与え個性を育てるという積極的な役割を果たした半面、学びを通して女性の性役割を押しつけたということが、作品分析の過程で明らかにされている。その点から考えると、学校教育を受けられなかった『老妓抄』の老妓が、老年に至っても人生の可能性を諦めないのと好対照である。また、『かやの生立』の乳母お常も、心豊かな人物であった。これらを通して、本論は、教育のもつ両義性を作品分析から浮かび上がらせているといえよう。

第五に、テキスト分析を通して、女たちは年代や置かれた立場や状況に関係なく、現状に満足せず自己の生をより充実させたいという渴望を抱いており、女たちを抑圧し、自由を阻害するのは、主に家制度および時代のジェンダー規範であることを明らかにしている。「豊かな生命力」「高い命への憧れ」とは、従来からかの子文学の重要なテーマとされてきたが、「生命力」の根源とは実は、現実との葛藤に淵源を発している点と指摘している点はきわめて重要であろう。

ただし、次のような問題点が指摘された。

作品の読みを、女性をめぐる社会規範に、いささか機械・図式的にあてはめてはいないか。外圧と内的抵抗とのせめぎ合いという単純な二項対立的構図に即したシンプルな物語として読んでよいか。

また、本論文では、「自我」「本来の自己」というものが先験的にあるかのように書かれているが、特に仏教思想に通じていたかの子が、自己というものをどのように捉えていたか、という問題があるのではないか。しかし、フェミニズム批評を根幹に据えた本論では、そこまでの言及は必要ないかもしれない。

終章で、かの子文学の文学的手法について、リアリズムとは異なる幻想的・浪漫的・耽美的と解される朦朧体的手法と述べているが、この問題は、今少し掘り下げる必要がある

のではないか。その手法が、登場人物たちを実態のない女性と解することを許してきたというのであれば、何故そのような手法が取られたのか、そのような手法にも拘わらず女たちの実相を描こうとしたのは、どういうことなのかを説明する必要があるだろう。今後の課題としてもらいたい。

また、作品内部の具体的な読みに関しても、次のような疑問や意見が出された。

『晩春』論における鈴子の転機の解説、および『娘』論の終結部の読みが、ややわかりにくい。『鮎』の主人公が家業を嫌うのは、戦時下で贅沢品を扱う商売だからと読んでいるが、果たしてそれだけか。自家の職人であることを意識して、親が敢えて娘を女学校に入れるというくだりと関わりがあるのではないか。

かの子は確かに時代のジェンダー規範や、自分の生まれ持った家・肉体・感情の矛盾に苦しむ女の姿を表現したであろうが、だからこそ彼女自ら「混沌未分」の域に憧れながら覚醒してしまった側面、きわめて理性的に西欧の思想や藝術観を探求しようとしながら失望したような側面も表現していると思われる。そうした観点からみると『花は勁し』や『混沌未分』の読みには、賛成できない点がある。

以上のように、問題点や疑問・意見、今後の課題も出されたが、申請者が本論文全体で、従来の研究とは異なる側面を切り拓いたことは高く評価できる。すなわち、かの子文学が、同時代の女が直面している問題に目を向け現実に生きる女の実相を抉り出しているという指摘や、それらの分析を通して、従来の研究の枠組みを大きく刷新したこと等、本論文が、かの子文学研究の進展に資することは疑いえないだろう。

なお、公開審査会において、質問の意図をよく理解し、不明とされた部分について明確に答えることができたことも、大方の評価を集めたことを付言しておきたい。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをご報告する。